優 秀 賞　公益財団法人北海道青少年育成協会長賞

伝えるために生きていく

空知地区　岩見沢市立東光中学校　３年　藤塚　麗瑠

「ねぇ、人権って何？」

テレビを見ていて、偶然耳にした「人権」という言葉は、小学四年生の弟には難しい。実際私も、十分な説明をしてあげる事が出来なかった。ネットで調べた簡単な一文がある。

「人間が人として本来持っている権利」

私の小学校入学を半年先に控えたある日、学校関係者からこう言われた。

「本気でお子さんを入学させるつもりですか」

六歳の私と両親を目の前にして、その人は言った。普通の小学校への入学は、両親にとってとても勇気のいる決断だった。沢山の人達のアドバイスや励ましのもと、やっとの想いで決心した両親。帰りの車で泣いていた母の姿は、今も脳裏に焼き付いている。

ある福祉従事者からは、

「国が何でもしてくれるなんて思わないで下さい」と言われた。利用したい福祉制度について、尋ねた時の返答がそれだ。

この人達の中に、私達「障がい者」とその家族の人権に対する意識は存在していたのだろうか。

でも、この世界はそんな人達だけではない。

近所の本屋の店員さんは、手を上に上げる力があまり無い私に対して、お金を取りに来てくれたり、お釣りをくれたりと、レジから私の所まで何往復もしてくれる。しかも、終始笑顔だ。

家族で札幌雪まつりへ行った時の事。雪で車いすが立ち往生。両親二人の力だけではどうにも出来なかった。

「大丈夫ですか」

一組の年配の夫婦が、私達を助けてくれた。

そして、両親にとても温かい言葉を残してくれた。

「せっかくなので、楽しませてあげて下さいね」

私にも、私にだからこそ感じられる、温かいエピソードも沢山ある。けれど、綺麗事だけでは人々は聴く耳をあまり持たない。だから私は、あえて辛い現実も挙げた。一人でも、多くの人に足をとめてもらえる様に。一人でも、多くの人の心に「何か」を届けられる様に。

私には夢がある。自分の希望する高校へ進学し、将来は検事になる事だ。その過程では、これまで以上に厳しい現実と向き合う事になるだろう。それでも私は、自分と同じ様な立場の人達の突破口となり、いつか夢を叶えたい。

あなたは、考えた事があるだろうか。「差別」の対象になる人達の苦悩の日々を。聴こうと思った事はあるだろうか。「障がい者の家族」の闘いの日々を。知ろうとしたことがあるだろうか。「関わる人」の、配慮の大きさ、有難みを。そして、無いとは思っていないだろうか。「障がい者」の、幸せな人生を。

昨年十二月、内閣府が「人権擁護に関する世論調査」を公表した。障がい者の人権問題についての最多の回答は「就職や職場での不利な扱い」次いで「差別的な言動をされること」だった。これも現実だ。けれど、この解答をした人達にも私と同じ様に、手を差し伸べてくれる人がきっと沢山いるはずだ。私はその全てを、あなたに知ってもらいたい。だから私はこれからも、伝え続けていく。そして私はこれから先も、人として障がい者として、誇りをもって生きていく。